# 沖縄県宮古郡多良間村水納島方言

セリック・ケナン

| 項目 | | 基本情報 |
|---|---|---|
| 話者情報 | 生年 | 1939年 |
| | 生育地 | 沖縄県宮古郡多良間村水納島 |
| | 性別 | 男性 |
| | 補足情報 | 父母は両方とも水納島出身である。中学2年生まで水納島に住み、高校を卒業してから1年間水納島に住んでいた。 |
| 解説 | 概要 | 水納島方言は南琉球宮古語の一方言である。宮古語諸方言の中で、多良間島で話される多良間方言に最も近い。水納島にあった集落は1771年に起きた大津波で全滅し、その後、多良間島の人が移住して再建されたため、そこで話される水納島方言は約250年前に多良間方言から分岐したと考えられる。アクセント、文法、語彙などは多良間方言にきわめて近い。しかし、その一方で、ɿ > i 、ɭ > i などの音変化が生じているため、水納島方言の音韻論は多良間方言のに比べ改新的である。<br>　明治生まれの話者は /ɿ/ を幾らか保持しており、また、/s/ が口蓋化していない発音（/sa/ [sa] ~ [ɕa]）も観察される。インフォーマントの大浦氏の発音は保守的な側面がある。すなわち、/s/、/ts/、/dz/ の後に /ɿ/ の母音を保持しているが、音声的には [ɨ] に近づいている（音韻表記ではを /ɨ/ 使用）。その他、/k/ に終わる子音語幹動詞の基本形において、/ki/と交替する /kɨ/ の音節も観察される。/ɨ/ を含む発音が古く、それと交替する /i/ の発音が新しいという意識がある。また、/s/ などが口蓋化していない発音もしばしば観察される。 |
| | 表記 | 表記はセリック・ケナン、大浦辰夫（2022）『みんなふつ語彙集』国立国語研究所に従う。それに加えて、/kɨ/ の音節に対して「キ゜」の記号を使う。仮名表記には無声化を示さない。ピッチの局所的な上がりや下がりを [ ] で表す。ただし、音調の認定に確信がない場合は、ピッチ記号を付けない。 |
| | 文法概説 | 音素目録は /p, b, m, f, v, t, d, n, r [ra] ~ [ɾa], s [sa] ~ [ɕa], ts [tsa] ~ [tɕa], dz [dza] ~ [dʑa], j, k, g, h/ の16個の子音と、/i, u, ɨ, e, a/の5個の母音から成る。長母音には /oː/ もある。/h/ は周辺的な音素であり、（伝統的な言葉において）数語にしか見られない。/ɨ/ は表層のレベルにおいて /i/ としばしば交替するが、インフォーマントの体系ではこの2つの母音が音韻的に混同されることはない。宮古語諸方言の中で口蓋化による対立（例えば /sa/ [sa] 対 /sja/ [ɕa]）がほぼないことが特徴的である。なお、[v] と [w] の対立はない。<br>　韻律体系については3つのアクセント型（a型、b型、c型）が区別される。a型は低音調が指定されておらず、高平あるいは低平で実現する。b型とc型はそれぞれ遅めと早めの位置で低音調が指定されている。この低音調はピッチの局所的な変動によって顕在化する。ピッチの変動は条件により、下降あるいは上昇で実現する。動詞はa型とbc型の2つのアクセントクラスが認められる。bc型動詞は一部の動詞形がb型、残りの動詞形はc型に所属する。系列別体系について、それぞれの型に所属する語群は琉球祖語で再建されるA系列、B系列、C系列に非常によく対応し、水納島方言の系列別体系は南琉球の中できわめて保守的であると言える。 |

| | | |
|---|---|---|
| 解説 | 文法概説 | 格体系は〈～ぬ／が〉「主体（ガ、使役者：ガ）、他動詞主体（ガ）」、〈～う〉「対象（ヲ）、経過域（ヲ）、対象/相手（被使役者：ヲ/二）」、〈～ん〉「場所（デ、二）、時点（二）、変化の着点（二）、相手（受身の動作主：二）」、〈～から〉「起点（カラ）」、〈～がみ〉「終点（マデ）」、〈～んけー〉「方向（ヘ）、移動の着点（二）、相手（二）、相手（被使役者：二）」、〈～しー〉「手段（デ）、起因（デ）」、〈～とぅ〉「相手（ト）」、〈～が〉「（動作の）目的（二）」から成る。主体の助詞は付く名詞によって形が交替し、名詞階層において高いものには〈～が〉が付き、低いものには「～ぬ」が付く。同形の連体助詞〈～ぬ／～が〉も同様である。共格（相手（ト））の標識は〈～ティー〉「引用節（ト、ッテ）、伝聞（ッテ）」とは区別される。対象の標識は動作の目的節という特殊なケースを除き、義務的であり、「示差的目的語標示（Differential Object Marking）」のような現象は見られない。<br>主題は〈～あ〉であるが、対格の標識に付く場合は〈～ばー〉の形式が使われる。主題の標識〈～あ〉は付く語の語末分節音によってそれと音韻的に融合することもある。例えば、〈い〉終わりの名詞に主題の標識が付くと、音韻的な融合が起こり、〈えー〉に変わる。具体的な例を挙げると、〈いき〉「行くこと」に〈～あ〉「主題」が付くと、〈いけー〉「行くことは」になる。累加は宮古語特有の〈～まい〉で表される。<br>活用体系について、動詞の基本形は日本語の非過去形より使用範囲が狭く、これからの一回限りの動作に対しては、基本形ではなく、宮古語全般の特徴である意思形あるいは未来形を使う。また、基本形はそのまま能力も表せる。中止形は2種類が区別されており、前後の動作が重なる場合（「Xをした状態でYをする」）は接続形、前後の動作が重ならない場合（「Xをしてから、Yをする」）は継起形が使われる。また、補助動詞構文には前者の接続形を使う。コピュラは〈あい〉という動詞であるが、（逆接など、他の文法的な範疇が表されていない）非過去の環境ではゼロ標識である。形容詞という独立とした品詞は認めがたく、形容的な表現は形容的語幹に様々な統語形態的プロセルを適用して作る。修飾用法では形容的語幹がそのまま修飾する名詞と複合語を形成し、叙述用法には〈～しゃ〉によって形成される形容的語幹の名詞・副詞形と補助動詞の〈あい〉「有る」の分析的な構文が使われる。 |

# 〔基本例文50〕沖縄県宮古郡多良間村水納島方言訳

| | 方言訳1（もっともよく使う表現） | 方言訳2（使うこともある表現） | 備考・コメント |
|---|---|---|---|
| 1 | なまから　どぅすんけー　てぃがみう　か]かずー | | 述語は意思形。一回かぎりのこれからの動作については必ず意思形〈～ずー〉か未来形〈～ぐまた〉を使用する。 |
| 2 | ふでぃしー　てぃがみう　か]きぴとぅまい　ぶいどぅすー | | 累加の助詞は〈～まい〉で、宮古語特有の形式。語源について定説はないが、日本語の「～も」と同源で、宮古語において化石的な形で残っている〈～ム〉「～も」を含んでいると考えられる。 |
| 3 | やーんけ]ー　いきってぃー　ふたきな　てぃがみう　かきたい | | 〈～ってぃー〉は継起専用の形式である。前後の動作が重なることを含意する接続形とは区別される。 |
| 4 | かきた]い　てぃがみう　いふけーりまい　ゆんのーす | | 〈いふ〉「幾」、〈～けーり〉「～回」。 |
| 5 | ゆい]ん　なりー　[じゅーじ]んないた[からー　ふたきな　にん]る | | 条件形は〈～たかー〉・〈～たからー〉によって表される。古い世代は〈～てぃかー〉〈～てぃからー〉とも発音し、「～てからは」に由来する。 |
| 6 | うかーっ]さ　あいば　[くるまみつう　あいき]な | | 形容的表現は分析的で、形容的語幹の名詞・副詞形（〈～さ〉派生）と補助動詞の〈あい〉「ある」の2文節から構成される。アクセント単位も2単位で、文節の境界がはっきりと意識されている。原因は接辞〈～ば〉によって表される。 |
| 7 | くぬ　しゅむつ]うばー　たろーん[けー　っふぃずー | | 述語は例文1と同じ形。主題化された目的語は対格標識〈～う〉が省略されず、対格特有の主題形〈～ばー〉が付く。 |
| 8 | ぴーまからー　あみぬ]どぅ　っふぃ　[ぱ]ず | | 推量は形式名詞の〈ばず〉によって表される。韻律的特徴を調べて確認しておく必要があるが、ここでは暫定的に多良間方言と同じく、連体節を受ける形式名詞として分析しておく。推量の確実性が高くなると、〈～ぐまた〉が使われる。 |
| 9 | うりず]ん　ないた[かー　ぱなぬ]どぅ　さキ° | | 〈ん〉終わりの名詞に〈～に〉「～に」が付くと、鼻音の縮小が起き、〈んー〉とはならない。 |
| 10 | はなこ]が　まどぅー　[あきーばどぅ　むすぬ　くまり]ー　きたい | はなこ]が　まどぅー　[あきたからー　むすぬどぅ　くまり]ー　きたい | 事実的条件は接辞〈～ば〉によって表されるが、条件形によっても表されうる。なお、この〈～ば〉は原因・理由の〈～ば〉、疑問形の〈～ば〉と同源である。 |
| 11 | すとぅむて]ー　あんだき　てれびう[ばー　みー]ん | | 否定形は〈～ん〉。「朝」は〈すとぅむてぃ〉、古典日本語の「つとめて」と同源。 |
| 12 | はなこ]ー　あん[しーぬ　ばんぐみうばー　みーま]い　しゅーん | はなこ]ー　あん[しーぬばんぐみ]ぬ　んめうばーみーまい　[しゅー]ん | 否定の取り立ては動詞の名詞形を〈～まい　しゅーん〉「～もしない」のフレームに入れて表す。bc型動詞の場合はこの名詞形がb型である。「～なんか」は複数の分析的な形式の〈～ぬんめ〉で表せる。この用法では、複数の意味がないことに注意されたい。〈あ]んしー〉「そんな」は（あん）（しー）のように2つの韻律語から成る。 |
| 13 | はなこ]ー　きぬーや　[てれび]うば　みーだ[たん | | 否定過去は〈～だたん〉。〈～だ〉は否定、〈～たん〉は過去。 |
| 14 | はなこ]ー　てれびう[ばーみー]んぐまたどぅ　しゅむつう[てーん　ゆみ]ー　ぶい | | 否定中止形は否定形〈～ん〉に未来の接辞〈～ぐまた〉を付けて形成される。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 15 | てれび]う　みー　[うかだかーくぬ　すぐとー　きゅーじゅー]ん　おヴぁりー　[うき　ぱ]ず | | 否定条件は〈～だかー〉または〈～だからー〉。反事実的条件は本動詞の接続形に続く補助動詞の〈うき〉によって表される。 |
| 16 | につう　んだし]ー　ぶい　っふぁんけーどぅ　ふすぅいゆ[ぬますた]い | | 熱を出した状態で薬を飲ませるため、本例文は継続相で翻訳される。継続相は動詞の接続形と補助動詞の〈ぶい〉「居る」によって表される。使役は〈～あす〉。 |
| 17 | あんなが]どぅ　みどぅんうっとぅん[けー　むぬこー]が　いかすたい | あんながどぅ　みどぅんうっとぅー　むぬこーがいかすたい | 被使役者は一般的に〈～んけー〉でマークされるが、対格〈～う〉でマークすることも可能である。使い分けは未詳。 |
| 18 | うっとぅ]とぅ　おーやーう[しーってぃどぅ　あが]てーんおとーん　[いざりた]い | | 受身は〈～あり〉によって形成され、受身の動作主は〈～ん〉「に」でマークされる。〈おとー〉「お父さん」は近代の表現で、本来は〈うや〉と言う。〈うっとぅ〉は性の意味を含まず、「年下のきょうだい」を指す。一人称の形式には〈あ〉と〈ば〉の両形があり、前者は後者より丁寧で、話し相手が目上の人に使いやすい。それぞれの形式は日本語の「吾（あ）」と「我（わ）」と同源である。 |
| 19 | やー]ん　ぶらーん　ばーんどぅ[ぬすどぅ]ん　くまらりたい | | 「留守」の訳は「家にいない時」。多良間方言と同じく、「入る」という意味に対して「籠（こも）る」と関係する〈くまい〉という動詞を使う。「入る」と同源の動詞を使う宮古語の他の方言とは対照的である。 |
| 20 | うぬ　っふぁー　みだ　いみしゃ　あいしゅがどぅ　むつかしー　かんじう　かきどー | うぬ　やらべ]ー　かんじぇー　かかりどぅ[す]ーど[ー | 逆接は〈～しゅが〉。この例文に対して可能形〈かかり〉をすぐに導き出すことができなかった。動詞の基本形〈かき〉自体は能力も表せ、本例文において日本語の「書ける」の的確な訳となる。確認調査では、可能形も使用できることを確認した（方言訳2）。 |
| 21 | きゅー]や　まどぅぬ　[あり]ーぶいば　よーんなー　[てぃがみう　か]かずー | | 述語は意思形。この例文に対して可能形は導き出せなかった。〈まどぅ〉は「暇（な時間）」。 |
| 22 | くぬ　っふぁー　みだ　いみ]しゃ　あいば　[ひらがなてーんどぅ　かかり]ー | | 〈～しか...ない〉の表現はなく、限定の意味を〈～てーん〉「～だけ」と動詞の肯定形で表す。 |
| 23 | つくえ]ぬ　ねーんにばどぅ[ずー]ぬ　じょーとーん　かかりん | | 可能形【状況】は〈～あり〉で、受身と同形。 |
| 24 | たろー]や　なま　とぅないぬへやんどぅ　しゅむつう　[ゆみ]ー　ぶい | | 継続相は例文16を参照。 |
| 25 | たろーや　はなこから　かいたい　ほんぬどぅ　とぅずみがみゆみー　ぶい | | 継続相【結果】は動詞の接続形と補助動詞の〈ぶい〉「居る」で表される。 |
| 26 | んねぴ　とぅりーとぅりぬとぅくまんどぅ　にんぶっさあい | んねぴ　ぬかーぬかぬとぅくまんどぅ　にんぶっさ　あい | 動詞の希望形は動詞に付く形容的語幹〈～ぶす〉によって形成される。〈～ぶす〉は日本語の「欲しい」と同源。「もっと」は〈んねぴ〉あるいは〈んめぴ〉。〈んね〉・〈んめ〉の部分は日本語の「今」と同源。 |
| 27 | ゆーや]きしーどぅ　てぃんぬあかしゃ　あい | | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 28 | やらびしゃ　あいけー　とーかーしー　ふいんけー　いけーゆーどぅ　うとぅるっさ　あたい | | 宮古語では動詞の基本的な語形がそのまま名詞に転じうるので、本例文の準体形は基本形と同形である。〈～しゅ〉によって形成される準体形も可能。〈とーかー〉「一人（one person)・独り（alone）」は宮古や八重山に分布する形式である。その語源は不明である。 |
| 29 | うどぅ]んとぅか　すぅばー　やっさどぅ　[あ]い　ぱず | うどぅ]んてーん　あらん　[しゅばな]ぎ　あた[かー　やっさ]どぅ　あい　[ぱ]ず | 「～や」に対して〈～とぅか〉を使用することもできるが、宮古語としては必ずしも一般的な表現であるとは言えないかもしれない。そもそも「～や」を使った並列の表現は宮古語では訳しにくい傾向がある。方言訳2はより明示的な表現であり、直訳は「うどんだけではなくて、そばなど」となる。 |
| 30 | ふるほんやーんどぅ　ほんぬ　たかーたか　かいとぅらすたい | | 形容的語幹の重複形は副詞形として機能する。「～てもらう」の表現はなく、使役形を使う。 |
| 31 | ヴぁーつきぬ　ばっしゃんどぅ　たーまい　くーん | てぃんきぬ　ばっ]しゃ　ありーどぅ　[たーまい　くー]ん | 形容的語幹の名詞・副詞形に〈～ん〉「～に」を付けて原因・理由を表すことが可能である。ただし、この用法は〈～ば〉に比べて確定条件の意味合いが強い可能性もある。接続形〈ありーどぅ〉による翻訳も同様かもしれない。存在量化不定語は疑問詞に〈～まい〉「～も」を付けて作る。 |
| 32 | んねぴ　やっさ　あたかー　かーいたい　ぱず　あいしゅが | んめぴ　やっさ　あたかー　かーいたい　ぱず　あいしゅが | 形容的表現は補助動詞によって形成されるため、条件形は動詞と同じく〈～たかー〉・〈～たからー〉である。 |
| 33 | とーかー]しー　あすびが　いかばまい　[むっとぅ　うみっ]しゃ　ねーん | | 形容的表現の否定は形容的語幹の名詞・副詞形と〈ねーん〉「ない」の補助動詞によって表される。譲歩は〈～ばまい〉。〈むっとぅ〉の前にピッチがリセットされるようである。 |
| 34 | てぃんきぬてーん　じょー]さ　ないた[からー　んでぃらり]どぅすー | てぃんきぬだん　じょー]さ　あた[からー　んでぃらり]どぅすー | 形容的表現の生起相は形容的語幹のはだかの名詞・副詞形と〈ない〉「成る」で表される。名詞・副詞形を〈～ん〉「～に」でマークすることは不可で、その点で形容的語幹の名詞・副詞形は名詞と区別される。極限は限定を表す〈～てーん〉「～だけ」を使うほか、〈～だん〉も使う。後者は日本語の「～だに」と同源である。 |
| 35 | たろー]や　みだ　ちゅーがくせいど[ー | | テンスなど、様々な文法範疇を表す形態素が要求されない場合、コピュラは用いられない。〈～どー〉「～よ」は終助詞。 |
| 36 | やらびぱだー　しんいんしーまい　うぷじんどぅ　あたいどー | | コピュラは動詞の〈あい〉である。〈あたい〉はその過去形。否定形は規則的な〈あらん〉で、否定形が補充形〈ねーん〉が使われる「有る」とは区別される。 |
| 37 | くれー　ぬすどぅぬ　ぱぎあとぅ　ぱず | | 推量は〈ぱず〉で表される。 |
| 38 | うれー　あが　さ]な　[かれー　しんしー]が　さな | | 一人称の形式について例文18を参照。この例文は2文で表現されており、2文目（〈かれー…〉）の始まりにはピッチがリセットされる。 |
| 39 | むすんが　あた]ー　じょーてぃんき　[あ]たからー　やらびぬ　[んめう　さーり　んだがらーんけー　いか | | コピュラは通常の動詞と同じ活用をしているため、条件形は〈～たかー〉・〈～たからー〉。〈いか〉「行こう」は相手を含む勧誘形である。勧誘形は子音語幹動詞の場合、語根に〈～あ〉を付けて作るが、母音語幹動詞の場合は語根と同形である（〈いでぃ〉「出よう」）。目上でない人を表す名詞の複数形は〈～ぬ　んめ〉の分析的な表現で表す。〈～ぬ〉は属格助詞で、〈んめ〉は「群れ」と同源とされている。「どこか」は〈んだがらー〉。全称量化不定語は疑問詞に〈～がらー〉を付けて作る（〈いつがらー〉「いつか」など）。 |
| 40 | くぬ　さなとぅ　くつぇー　あが　むのー　あらん | | コピュラの否定形は形成が規則的な〈あらん〉である。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 41 | A:あたま]い　くまん[けー<br>くーず]な<br>B: ん]ー　[くー]てぃどぅ　うめー　[ぶ]い | A:あたまい　くまんけー<br>きーぐまたな　B: んー<br>くーてぃどぅ　うめー<br>ぶい | 例文1と同様にこれからの一回限りの動作に対しては基本形は使わず、意思形〈くーずー〉か未来形〈きーぐまた〉を使う。肯否疑問文は終助詞〈～な〉で作る。この〈～な〉は特殊な韻律的な振る舞いを示しており、アクセント型の実現とは無関係に先行する音節が必ず高く、それ自体が必ず低く付く（例文42Aの述語を参照）。目下や同等に対する肯定応答詞は〈んー〉、目上に対しては〈おー〉。 |
| 42 | A:ぬ]ったい　くーんにば<br>[く]ーてぃーどぅ　いじー　ぶたい　あ[らん]な<br>B:ぐぶり]ー　[いぴーっちゃ<br>ぱだー　ねー]ん | | 疑問詞疑問文において述語が〈～ば〉によって形成される疑問形になる。Aの〈くーんにば〉は否定疑問形。引用助詞は〈～てぃー〉で、相手・並列の〈～とぅ〉とは区別される。〈ぐぶりー〉「ごめん」は「御無礼」の借用語。「少し（少量）」は〈いぴーちゃ〉で、それに含まれる〈ちゃ〉は（通時的に）副詞形を作る要素である。〈くーんにば〉と〈ぐぶりー〉の後に文境界があり、ピッチがリセットされる。 |
| 43 | A:かま]ん　ぶい　むのー　[たろー]な<br>B：あら]ん　た[ろー]や　あらん　じ[ろ]ー　あ[らん]な | | 準体法の一つに〈むぬ〉を形式名詞として使った用法がある。否定応答詞はコピュラの否定形である。否定のコピュラ文では名詞が主題形になる。ただし、〈～まい　あらん〉「でもない」などのように取り立てに関わる他の助詞に入れ替えることも可能である。 |
| 44 | A:んでぃぬが　っヴぁが　しゃな　あいば<br>B:くいがどぅ　あが　しゃな | | 質問において動詞の疑問形が要求されるため、コピュラが用いられるが、それに対する返答では用いられない（例文35を参照）。二人称は〈っヴぁ〉で、基本的に同等か目下の人に使う。目上の人には沖縄語からの借用語である〈うんじゅ〉を使う。 |
| 45 | A:くぬ　しゅむつう　ゆまでぃ<br>あたかー　からしゃんーな<br>B：うぬ　ほん　あたかー　んめ　ゆみーどぅ　うき | | 〈～んー〉は疑問文特有の意思形である。多良間方言では一人称の肯定文でもこの動詞形が使えるが、水納島方言のインフォーマントは疑問文以外の用法を許容していない。動作が完了していることを補助動詞の〈うき〉「おく」で表す。 |
| 46 | A:とぅないぬ　やーんけー　ぬすどぅぬ　くまいたいてぃーな<br>B：えー　あんしーな　とぅないんけー　くまいたらぱー　あんたーまい　きーう　つきだかー　ならんやー | | 伝聞は文末に付く引用助詞の〈～てぃー〉で表す。〈～たらぱー〉は過去条件形。当為を表すには日本語とパラレールな表現が使われる。すなわち、動詞の否定条件形に〈ならん〉「成らない」を後続させる。同意要求は終助詞〈～やー〉によって表される。〈あんたー〉は相手を含まない排他複数形である。 |
| 47 | A:あみぬ　っふぃぶっすぅぎ<br>なりー　ぶいば　まどぅー　しみー　うきー　っふぃるよー<br>B:んめ　しみーどぅ　うき | | 様子は〈～ぶっすぅぎ〉の形容的語幹によって表される。〈～ぶっすぅぎ〉は〈～ぶす〉「～たい（希望）」に〈～ぎ〉「～ようだ」が付いた形式である。〈～よー〉は命令形とよく共起する終助詞である。「～ておく」や「～てくれる」は接続形に後続する〈うき〉「おく」と〈っふぃ〉「くれる」によって表される。なお、宮古語の接続形は日本語の「て形」とは同源でないことに注意されたい。 |
| 48 | A:しゅばふぉーが　いかんーな<br>B:しゅばゆ]いしゃー　うどぅんぬどぅ　[ま]す[や]ー | | 〈～んー〉は疑問文特有の意思形（例文45を参照）。比較の基準は〈～ゆいしゃー〉で表す。b型の〈しゅば〉「そば」に付いた時の実現パターンでも確認できるよう、この助詞は（ゆい）（しゃー）のように2つの韻律語を形成する。「（～のほうが）いい」は〈ます〉で表す。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 49 | A:いろはしょてんてぃぬ　ほんやぬ　んだんが　あいが　っさんな<br>B:っしーどぅ　ぶいよー、かまん　かんばんぬ　みらりー　ぶいさー | B:っしーどぅ　ぶ]いよー　うまんどぅ　[かんばん]ぬ　みーらりー　[ぶ]いだらー | 終助詞の〈～さ〉は強めの主張である。その代わりにニュートラルな〈～だらー〉も使える。 |
| 50 | A:ほんじょーうどんてぃー　ふぉーたい　ばーや　あいどぅすーな<br>B:んー　かれー　ほんとー　んまいどー | | 〈あいどぅすー〉は動詞の焦点形。動作の有無（「するか・しないか」）が聞かれているため、動詞の方に焦点標識を付ける。〈ふぉーたい　ばーや　あい〉は「食べたことがある」の直訳で、動詞の接続形に〈みー〉「見る」を後続させた表現もよく用いられる。 |